みえメディカルバレーフォーラム2007 ～連携による将来像『新しい拠点づくり』～

Mie Medical Valley Forum 2007

9月4日（火）、津市のホテルグリーンパーク津に産学官民の166名が集まり、「みえメディカルバレーフォーラム2007」が開催されました。三重県の野呂知事、三重大学の豊田学長、中部経済産業局産業部の辻部長のあいさつに続き、はままつ産業創造センターの小出氏による講演、6名のパネリストによるパネルディスカッションが行われ、新しい拠点での連携像をめぐる議論が交流会まで活発に続きました。

■メディカルバレーフォーラム2007

基調講演 ネットワークから生まれる新商品!! 新事実!!

はままつ産業創造センター〔(財)浜松地域テクノポリス推進機構〕ビジネスコーディネーター　小出宗昭氏

■小出 宗昭 氏

小出氏は2001年、静岡で13ブースの小さなインキュベーション施設「SOHO静岡」を任されました。小出氏は、産業振興の本来あるべき姿を追求し、ニーズを徹底的に追及するため、施設外のネットワークを活用することに決め、多くの時間を外(外の起業家、既存産業の人たち)に向け、多様な企画を実施しました。その結果、月に100人の相談者が訪れるようになり、地場産業のおしゃれな下駄、主婦によるだっこひも、スポーツ栄養士によるスポーツ弁当といったヒット商品につながりました。

三重の新しい拠点から成果を生み出すためにもネットワークが重要であることが再確認されました。

パネルディスカッション 「産学官連携による地方の将来像 ～新しい拠点づくり～」を語る

座長
奥村克純　三重大学　副学長

パネリスト
口木純一　(学)鈴鹿医療科学大学　理事長
前田広人　三重大学生物資源学部　教授
武田穣　名古屋大学　教授
中畑裕之　(株)百五経済研究所地域調査部　部長
三田泰久　(株)三重ティーエルオー・クラスターマネージャー
向井正治　三重県健康福祉部　部長
（敬称略）

続いてのパネルディスカッションでは、各パネリストからそれぞれのネットワークの取り組みが紹介されました。鈴鹿医療科学大学の口木理事長からは薬学部の設置と三重大学や地域産業との連携、三重大学の前田教授は伊賀サテライトキャンパスでの活動の抱負、名古屋大学の武田教授は米国に設置準備中の名古屋大学フロントへの三重県の大学や企業の参加について紹介していただきました。また、百五経済研究所の中畑部長は三重県内での産学官連携の成果、三田クラスターマネージャーはみえ医療・健康・福祉産業クラスターの展開、健康福祉部の向井部長からはみえメディカルバレープロジェクトの人的ネットワークについて紹介がありました。各パネリストからは、拠点を活用してより一層連携を進める決意、要望が表明され、アドバイザーの小出氏からは、「各々の立場でネットワークに前向きなのはすばらしい」という評価をいただきました。

講師インタビュー

小出宗昭氏は静岡銀行から派遣された「SOHOしずおか」で6年半、起業マネージャーとして多くの事業を成功させました。今年の7月に、浜松市に新しくできた 産業支援施設「はままつ産業創造センター」へ出向された小出氏に、地方での産業振興についてお話を伺いました。

■はままつ産業創造センター
ビジネスコーディネーター　小出 宗昭 氏

Q 小出さんは静岡で多くの成功例を生み出されました。地方の産業振興についてはどうお考えでしょうか？

A 起業に成功する要素には3つあると考えています。オンリーワンの要素があること、情熱の持続力があること、起業家の行動力があることです。このうちオンリーワンの要素はもっとも大切な要素です。その点、競争の激しい首都圏でオンリーワンになることは大変なことです。しかし、三重県でオンリーワンになるのは、もっとやさしいかもしれません。起業マネージャーの立場からみると、地域には潜在的に生かされるものがたくさんあります。それを呼び起こすのが自分の役目だと考えています。

前任地の静岡は気候温暖な伝統ある地方都市で、のんびりした地域です。これは日本の地方都市に共通した傾向ではないでしょうか。その静岡で結果が出せました。同じ日本人でそんなにメンタリティが変わるわけはありません。誰かがその潜在能力を信じて応援してあげれば、とてつもない成果が生まれてきます。

私は昨年、三重県の朝明商工会に招かれました。担当者の方が非常に熱心なので創業塾、経営革新塾の講師を引き受け、私も斬新なコンテンツで臨みました。その結果、圏域人口2万人のこの小さな商工会で70名ほどの方が講座に申込み、50数名が参加されました。これは（この講座では）全国で最高の数字です。小さな商工会がそこまでがんばれたのは、強い思いと内容があったからだと考えます。何ごともトライしてみることが大切です。

Q 行政や大学の役割についてはどうお考えですか？

A 行政に願うことは、継続性と、サポートするスタンスを変えないことです。継続性とは1年や3年単位ではなく、長期で取り組むことです。もちろんパフォーマンスの査定は必要です。サポートするスタンスについては、静岡の場合、金は出すが口は出さず、バックヤード（決算書や報告書などの書類作成）は全て支えてくれました。私が静岡銀行の派遣であることも関係していたかもしれません。静岡銀行は、6年半、手弁当で私を送り出し、口も出しませんでした。立派なことです。このような地域金融機関の役割も大きいと考えます。

また、大学にはビジネスの種がたくさんありますので、それが地域の産業に生かされるといいと考えます。そうすれば、県内の産業がもっとスーパーなものになる可能性があります。大学との関係は基本的には今の流れでいいと考えています。

第6回 産学官連携推進会議

report

展示会に共同出展し、メディカルバレーをPR

6月16日（土）、17日（日）の2日間にわたり国立京都国際会館において開催された『第6回産学官連携推進会議』に、三重大学、津市と共同で出展しました。

このイベントは、国（内閣府、総務省、文部科学省、経済産業省等）が日本のイノベーションの創出に向け産学官の新たな展開を図ることを目的に開催しており、産学官連携の第一線で活躍するリーダーや実務者等が全国から参加し、基調講演、分科会、ブース展示などを通じて、研究協議、情報交換、対話・交流が行われました。（参加者　延べ約3，000名）

特に、大学、企業、研究機関、自治体等がその活動成果を発表した展示ブースには242ブースが出展された中、当ブースでは、三重大学の「地域連携、医療・健康、伝統産業」といったテーマのもと、みえメディカルバレープロジェクト、みえ治験医療ネットワーク等を紹介し、多くの国内の大学、企業等と意見交換、情報交流ができ、メディカルバレープロジェクト等を情報発信する絶好の機会となりました。

■ 三重大学、津市、みえメディカルバレープロジェクト共同出展ブース

国際バイオEXPO

report

大学・公的研究機関、医薬品・食品メーカーなどバイオ関係者が集う第6回国際バイオＥＸＰＯが、6月20日～22日の3日間東京ビッグサイトで開催されました。ビジネスに直結する商談展として出展者から高い評価を受けているこの展示会には、日本はもとより、アジア・欧米など世界各国から、研究支援機器・試薬メーカーやバイオクラスター、バイオベンチャーなど過去最多の595社（前回533社）が出展し、国際イベントとして盛大に開催され、18,692名が来場しました。

当プロジェクトは、東海バイオものづくり創生プロジェクトの一員として、ＮＰＯバイオものづくり中部及び関連企業6社とともに共同出展し、国内外に向けて情報発信を行いました。

また、併設企画として開催された「バイオアカデミックフォーラム」には、全国の大学・国公立研究所から154のバイオ系研究室が参加、三重大学からは3研究室が最新の研究成果を発表するとともに、「バイオ研究支援製品・技術セミナー」では県内の出展企業もプレゼンテーションを行いました。

■ みえメディカルバレープロジェクト出展ブース

■ 共同出展ブース

■ プレゼンテーション